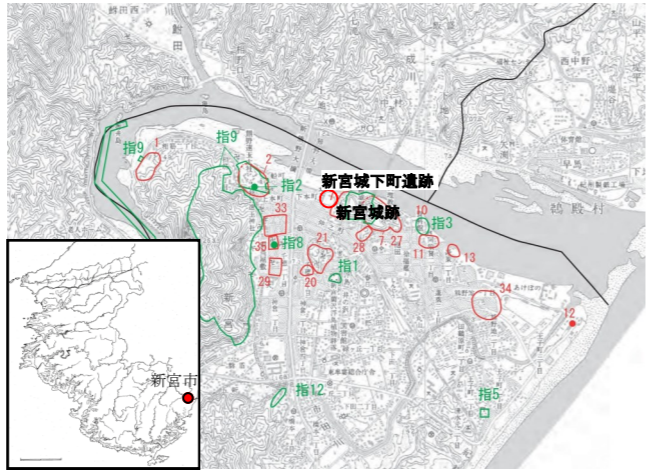


**新宮城下町遺跡
現地説明会資料**
～道路と家臣の屋敷地を発掘～

平成28年3月26日(土)
主催 新宮市教育委員会
(公財)和歌山県文化財センター



1 はじめに

新宮市教育委員会では、(公財)和歌山県文化財センターに委託して新宮城下町遺跡の発掘調査を実施しています。発掘調査は新宮市文化複合施設建設に伴うもので、第1次調査は、平成28年2月末から5月末までの予定で行っています。調査箇所は、新宮城跡の西側に位置する旧丹鶴小学校の敷地内になります。調査面積は約2,300㎡で、現在はその半分の面積を調査中です。

2 新宮(丹鶴)城について

新宮城は、関ヶ原の戦いの後、紀州藩主となった浅野幸長の重臣である浅野忠吉が慶長六年(1601)に築城を開始しました。元和元年(1615)に一国一城令により廃城となりますが、元和四年(1618)に再び築城が認められます。しかし、元和五年(1619)に幸長が広島に転封になるのに伴い、忠吉は備後三原城へ移ります。紀州藩主には徳川頼宣がなり、新宮城には付家老である水野重仲が入り築城を続けます。2代重良は伊佐田の堀を掘削するなどして、寛永十年(1633)に完成しました。その後も、3代重上が石垣などを造築し、寛文七年(1667)にほぼ現在の形になったとされています。城下町も、江戸時代前半頃には、幕末に近い町割りとなっていたことが絵図などから窺うことができます。

3 調査の成果

調査では、これまでに江戸時代の南北に延びる幅4.8mの道路と、その両側に造られた家臣の屋敷地が数区画見つかっています。

道路は「河原町通り」と呼ばれていたもので、熊野川に向かって下っています。表面は硬く叩き締められ、両側には石組みの排水溝が設けられています。屋敷地は石垣などで区画され、やはり川方向に段を成して下っています。また、屋敷地の間口は約35mあり、大規模な敷地であったことが窺えます。道路や屋敷地の区画は、昭和南海大震災があった昭和21年頃まで使用されており、江戸時代の地面は大きく破壊されていました。ただ、礎石が沈まないように並べた根固め石が各所で見



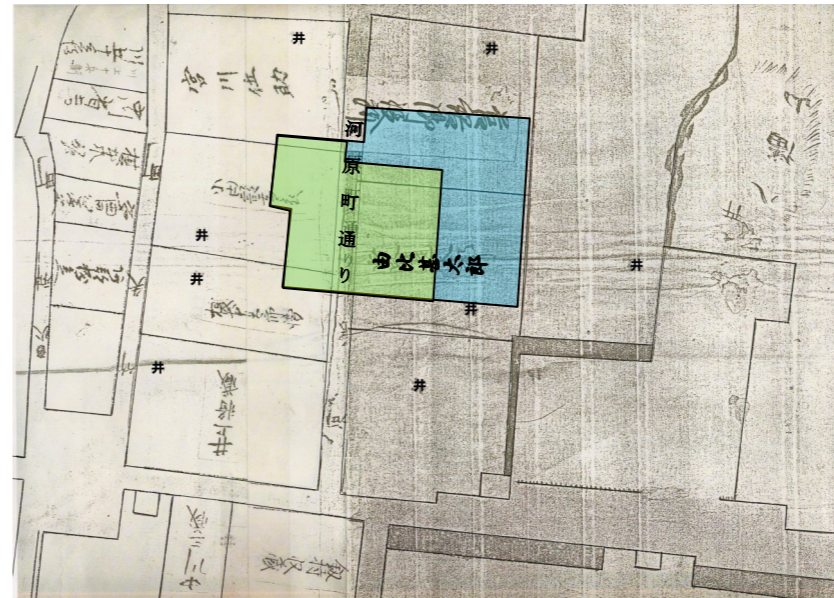
新宮古図(1647～1651) (新宮木材協同組合蔵)

ついていることから、重厚な建物が建てられていたことが想像できます。また、排水溝に蓋石が架けられた箇所の屋敷側には框石があり、入り口であったことが想像できます。

4 まとめ

新宮城下町を描いた絵図は、いくつか伝わっていますが、その中で幕末頃に描かれた絵図は、今回、発掘調査で見つかった区割りと似通っており、当時の状況を髣髴させるものです。

家臣の屋敷地でありながら、城と変わらない様な重厚な石垣など、熊野川沿いで調達できる花崗岩をふんだんに使用しているのが大きな特徴で、新宮城主水野氏の城下町の様子を窺う貴重な発見であると言えます。



幕末頃の調査区付近の絵図(新宮市立図書館蔵)

■ 今回の調査 ■ 今後の調査



調査区全景



道路の西側屋敷地の石垣



道路の東側屋敷地入口



石組み土坑



礎石根固め石